

**環境計測研究分野(総合)**

<b>委員会からの主要意見</b>
現状についての評価・質問等
○各研究は着実に進捗しており、環境研究を支えるための分析技術、モニタリング技術・システムの開発、改良、高精度化等が行われている。[年度]
○過去の外部研究評価での指摘を踏まえ、環境計測研究への期待を分野のミッションとして明確に定めたことにより、国立環境研究所の研究能力の向上に寄与するようになったと評価できる。[年度]
○センターの室長の兼任が多すぎる。将来を考えた人材育成も必要ではないか。[年度]
○民間企業がしのぎを削る分野との競合も見受けられる。例えば浅海域水底観測システムなどは、環境計測コンサルなど多くの企業がシステムを提案しており、また、開発を進めていると思われる。[見込み]
今後への期待など
○他センターとの連携をさらに進めて、さらなる研究の推進をして欲しい。[見込み]
○網羅的な分析手法の開発や衛星搭載型ライダー・分光放射計による植生・エアロゾルの種別分別手法の開発など費用と長期間を要する手法の開発は、他所ではできないと思うので、今後も着実に進めてほしい。[見込み]

<b>主要意見に対する国環研の考え方</b>
① 環境計測研究センター内に閉じることなく、他の研究センターや所外の研究機関・研究グループとも一層の連携強化や新たな連携の模索を進めたいと思います。
② 室長兼務ならびに人材育成については、現在着実に若手・中堅が成長しつつあるので、現在は過渡期とご理解下さい。将来を考えた人材育成は、室長兼務の有無に係らず重要ですので、研究分野全体ならびに研究所内の関連分野全体としても、しっかりと取り組んでいきたいと存じます。
③ 民間企業がしのぎを削る分野との競合もありますが、現時点では、むしろ民間企業とも連携をして、様々な方法論一例：浅海域水底観測システムーの開発に取り組んでおり、その中で、例えば特許の申請なども行っています。
④ 網羅的な分析手法開発や衛星計測手法開発等、大学や他の研究機関ではなかなか取り組めない課題に取り組むことが出来る研究環境がある点は、当研究所で研究を行う者(グループ)にとって大きなメリットです。その優位性や恵まれた環境があることを活かし、また恵まれた環境に甘んじず、今後とも研究を進めていきたいと存じます。